

# 語源学入門--ヨーロッパ言語の形成

森田信也(「ヨーロッパの言語と文化」、「インターネット英語」担当)

## I. インド・ヨーロッパ語族

問題1: 以下の cow と ox に対応する各国語をその特徴で3つのグループに分類し、英語の cow と ox はどのグループに入るか考察せよ。

「牛」を意味する2つの英語 cow と ox に対応するヨーロッパの各国語

英語	cow	ox
フランス語	vache	boeuf
スペイン語	vaca	buey
イタリア語	vacca	bue
ポルトガル語	vaca	boi
ドイツ語	Kuh	Ochse
オランダ語	koe	os
スウェーデン語	ko	oxe
デンマーク語	ko	okse
ポーランド語	krowa	wol
チェコ語	krava	vul
クロアチア語	krava	vo
ロシア語	karova	vol

## II. Etymology 「語源」

問題2: 英語の beef と cow は同じ語源である。○か×か?

猿と人を分ける最大の要素は「言語」である。その人類が最初に使っていた言葉は、どんなものだったのかは非常に興味深い。しかし、話し言葉はすぐに消えて行く運命にあり、初期の言語のスタイルはどんなものだったのかは知るよしもない。遺跡に残された文字などでもどんなに古くても紀元前3000年程度で、人類はすでに10万年前から言葉を話していたと考えられる。そこで、言語の起源についての諸説を考えてみることにする。

- (1)オノマトペ(擬声語)説→ワンワン説: 犬が「ワンワン」鳴く、雨が「ザーザー」降るなど。
- (2)自然発声起源説I→アイタッタ・アッチッチ説: 英語の ouch とか oops などとその典型。
- (3)自然発声起源説II→エンヤコラ・ドッコイショ説: 「イッセーノーセ」「ドッコイショ」など。

特に動物の命名法などは、「牛」のcowも原始ヨーロッパ語(印欧祖語)では、\*g<sup>w</sup>ou- という音だったと推定されている。サンスクリット語ではgo-, 原始ゲルマン語(ゲルマン祖語)では、\*kouz- > 古英語 cu > 現代英語 cow、またラテン語ではbosだが、\*g<sup>w</sup>ou-の/gw/の/w/という唇を丸めた音が優位になれば、/b/や/v/という音が現れるのである。逆に喉の奥で発声する/g/が優位であれば、/g/や/k/という音が現れるのである。従って、ラテン語bosから変化したフランス語のbœufを経由して英語に流入したのがbeefで、もともとゲルマン系から英語に進化したのがcowでどちらも語源は同じなのである。また、言葉を

習得する途上にある赤ん坊は、犬をその泣き声からワンワンと言ったり、アヒルをガーガーと言ったりすることから、言葉の習得とオノマトペは密接に関係していると考えられている。

**問題3:** 原始ヨーロッパ世界では、「牛」の鳴き声は\* g<sup>w</sup>ou- (グオオウ)と推察されているが、「豚」の鳴き声はどんなものだったか、以下の資料から推測せよ。

サンスクリット語 sukarah「猪、豚」 アヴェスタ語 hu「猪」 ラテン語 sus「豚」 c.f. 英語 swine「豚」

日本語で豚の鳴き声は「ブーブー」が一般的である。現代英語の sow「雌豚」は、上に掲げた資料の中のラテン語 sus と同じ語源である。Klein の語源辞典 A Comprehensive Etymological Dictionary of the English では、\*su-という印欧語根を再建している。ここから、古代ヨーロッパ社会における豚の鳴き声は、「スースー」あるいは「シューシュー」と推測される。

**問題4:** 「カエル」を意味する語、フランス語 grenouille と英語 frog の語源について考察せよ。

ラテン語では rana という語であったが、カエルの一般的な鳴き声「ゲロゲロ」に影響されて、後に語頭に/g/という音が加えられて、フランス語の grenouille となった。そこから鳴き声つまりオノマトペ (擬音語) の感覚が感じられる。

一方、英語の frog は、印欧祖語の\*preu- “to hop” 「飛び跳ねる」が語源である。こちらは、「ぴよんぴよん」という擬態語による感覚が感じられる。

ちなみに、日本語のカエルの語源は、「日本国語大辞典」では、6つの語源説を引いている。元のところへ必ずカヘル (帰る)、孵る (カヘル)、還る (カヘル)、ヨミガヘル (蘇生)、その鳴き声から、などの説が紹介されているが、感覚としては、「ぴよんぴよん」と跳んで、徘徊していても「元のところへ帰る」という帰巢本能を起源とする説が有力であるように思う。

### Ⅲ. 社会システムの影響

**問題5:** 現代の暦 Calendar から分ることは？

	ラテン語	フランス語	イタリア語	スペイン語	英語の暦月
1	unus	un	uno	uno	January
2	duo	deux	due	dos	February
3	tres	trois	tre	tres	March
4	quattuor	quatre	quattro	cuatro	April
5	quinque	cinq	cinque	cinco	May
6	sex	six	sei	seis	June
7	<b>septem</b>	sept	sette	siete	July
8	<b>octo</b>	huit	otto	ocho	August
9	<b>novem</b>	neuf	nove	nueve	<b>September</b>
10	<b>decem</b>	dix	dieci	diez	<b>October</b>
					<b>November</b>
					<b>December</b>

## ローマ暦からユリウス暦へ

→現在のグレゴリオ暦に受け継がれ、西暦の元になった暦

- ・地球温暖化以前の古代のヨーロッパの冬は厳寒

- ・太陰暦で年間に10か月のみ→冬はノーカウント→春が来て3月が1年のスタート

3月が第1の月→(冬眠から覚めて)始動開始→戦闘体制→Mars(マルス神=戦争の神)

4月は第2の月→春が来て芽が「開く」月→aperire「開く」 cf. aperitif「食前酒」(←胃を開く)

5月は第3の月(→豊穡の女神Maia)、6月は第4の月(→ジュピターの正妻Juno)、

7月が第5の月→Quintilis、8月が第6の月→Sextilis、9月が第7の月→September、

10月が第8の月→October11月は第9の月→September、12月は第10の月→December

- ・後にジュリアス・シーザーの生まれ月にちなんでQuintilisがJuliusに

- ・さらにアウグストゥスの生まれ月にちなんで、SextilisがAugustusに

- ・さらに1月Januaryと2月Februaryを加えて、12ヶ月に。→2月だけ28日。

問題6:以下の表に適切な英語を入れて、表を完成させなさい。

英語における生きた動物と食肉を表す語

動物名(日本語)	動物名(英語)	食肉(英語)	動物名(フランス語)
牛	cow	( )	bœuf
子牛	calf	( )	veau
豚	pig	( )	porc
羊	sheep	( )	mouton

→英語だけが動物名とその食肉名が違う、つまり、食肉は「おフランス」製。

生きている動物の間は、ox/cow, calf, sheep, swine/big, boar, deerという英語古来の語彙が、食肉としてテーブルに供されると、beef, veal, mutton, pork, brawn, venisonというフランス語由来の語彙に名称が変わる。これは、支配階層(=フランス人)が料理を食べ、生きた動物の世話をするのは一般庶民(=イギリス人)だったためと一般に言われるが、一方で、フランス料理の優越性のため、料理法や料理に関する語彙が大量に流入したという見方もできる。ソース、ボイル、フライなどいった料理用語はすべてフランス語由来である。

問題7:空欄を埋めなさい。

★( )肉に由来する加工食品:

bacon「ベーコン」<古仏語<フランク語 bako 'ham'→( )肉を塩漬けにして燻製にしたもの

ham「ハム」<古英語<古ゲルマン語 hammo 'ham'→( )のもも肉を塩漬けにしたもの

lard「ラード」<古仏語<ラテン語 lardum 'fat of pork'→( )肉の脂身

★ゲルマン民族は猪の丸焼きを食べていた?

brawn「いのしし肉」<古仏語<フランク語 brado ‘roast meat’→ローストする肉は「猪」  
語彙は文化を写す鏡→「桜＝馬肉」「牡丹＝猪肉」「紅葉＝鹿肉」「柏＝鶏肉」

問題8: 英語の deer「鹿」という語彙の意味変化について考察せよ。

古英語 dēor「動物」 → 中英語 dēr「鹿」 → 現代英語 deer「鹿」

→deer「鹿」と zoo「動物園」は同じ語源である。

西暦900年ぐらいまではdēorという形で「動物一般」を示し、西暦1200年ごろまでには、dērという形になり、意味はやはり「動物一般」を指していた。西暦1200年ごろのイギリス社会では、「鹿」が狩猟の対象として最も一般的であったため、この単語が角とひづめを持つ鹿類の代名詞的存在となり、西暦1400年代までには、もはや「動物一般」という意味ではなく「鹿」という意味に特化していった。(意味の縮小)

1066年のヘイスティングスの戦いを経て「ノルマンの征服」で、イギリスはフランス人により征服され、支配階層はフランス人となる。そこで、フランス語の animal という語が英語に流入し、deer が「鹿」という意味にシフトすると同時に「動物一般」を意味する語が空席になり、フランス語起源の animal という単語がその位置を英語でも占めるようになった。ついでに、この animal「動物」という単語の語源は、ラテン語の anima「魂、呼吸」が古フランス語で「息するもの」>「生き物」という意味の成り立ちは、deer と全く同じである。先史の印欧祖語では、\*dheu-「息をする」からゲルマン祖語\*deusam が生じ、「息するもの」>「生き物」となった。

ちなみに、英語とフランス語では「動物園」をいずれも zoo というが、印欧祖語\*dheu-から派生したギリシャ語 zoon「生き物」が起源で語源は同じである。日本語式に言い換えれば、ディアーの「デ」もゾーの「ヅ」もともにダ行音(ダヂヅデド)である。

ノルマンの征服以前→「動物」=deer(語源は「息するもの」>「生き物」>「動物」)

ノルマンの征服以後→「動物」=animal(語源は「息するもの」>「生き物」>「動物」)

#### 参考文献:

Buck, C.D.(1988) *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, The University of Chicago Press.

Ernout, A. et Meillet, A. (2001) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck.

Klein, E.(1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English*, Elsevier

Watkins, C. (1985) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, Houghton Mifflin Company.